

〔原 著〕

ひとり親家族等用家族機能尺度 (Family Functioning Scale for Single-parent Families: FFSS) の開発と信頼性・妥当性の検討

平谷 優子¹⁾ 堀口 和子²⁾ 法橋 尚宏³⁾

要 旨

ひとり親家族とふたり親家族では家族機能が異なることが明らかにされているが、ひとり親家族用の家族機能尺度は見当たらない。本研究の目的は、ひとり親家族等用家族機能尺度 (Family Functioning Scale for Single-parent Families: FFSS) を開発し、その信頼性・妥当性を検討することとした。

子育て期のひとり親家族の家族機能研究の成果と文献検討の結果をアイテムプールとして項目精選を行い、FFSSを開発した。これは、21項目で構成される自記式質問紙であり、表面的妥当性は研究者4名で確認した。1箇所の保育所でひとり親家族を対象に質問紙調査を実施し、FFSSを修正した後、全国の認可保育所・無認可保育所・認定こども園に通う子どもをもつひとり親家族を対象に信頼性と妥当性を確認するためのインターネットモニター調査を実施した。

その結果、上位-下位分析では全項目において上位群と下位群の得点に有意差が認められた。FFSSとFeetham家族機能調査日本語版I (FFFS-J) のSpearmanの順位相関係数は-0.34、FFSSと配偶者に関する項目を除いたFFFS-JのSpearmanの順位相関係数は-0.39で併存妥当性が支持された。構成概念妥当性を確認するために行った因子分析の結果、2因子構造であることが確認できた。Cronbachの α 係数は0.93であり、内部整合信頼性は高かった。FFSSの1回目の回答から2週間程度の間隔をおいた総得点のSpearmanの順位相関係数は0.81であり、反復信頼性が確認できた。FFSSは、ひとり親家族の家族機能を評価する信頼性・妥当性を具備した尺度である。ひとり親家族の家族支援の実施や研究に本尺度が寄与することを期待したい。

キーワード：ひとり親家族、家族機能、尺度開発、家族支援

1. はじめに

現代の家族構成のマジョリティーは、就業している夫と専業主婦の妻からなるふたり親家族ではない (Bomer, 2004)。近年、日本では、離婚によるひとり親家族が増加している。日本では、2008年に改定された保育所保育指針において看護職者の果たす役割が明確に盛り込まれて以降、看護職者配置への機運が高まり (日本保育協会, 2009)、看護職者は

病院だけではなく保育所などの多様な場で子育てをしているひとり親家族を支援する機会が拡大している。家族は情緒的なサポート、疾患や治療に対する適応行動、医療費や健康保険の支払いなどの極めて重要な役割を担うため、看護職者はふたり親家族とは異なる家族構成のひとり親家族の特徴を理解し、エビデンスに基づいた家族支援を行う必要がある。そして、家族支援の目的は家族機能の維持・向上である (法橋, 堀口, 樋上, 2010) ことが明らかにされている。

日本の子育て期のひとり親家族の家族機能に焦点を当てた家族看護学研究は、離婚を経験したひとり

1) 大阪市立大学大学院看護学研究科小児看護学領域
2) 兵庫医療大学看護学部
3) 神戸大学大学院保健学研究科家族看護学分野 (家族支援 CNS コース)

親家族の家族機能をミックス法により明らかにした研究(平谷, 法橋, 2009), ひとり親家族とふたり親家族の家族機能を比較した量的研究(Hiratani, Hohashi, 2010), 特別支援学校に通う子どもをもつひとり親家族の家族機能をミックス法により明らかにした研究(Hiratani, Hohashi, 2013), ひとり親家族の家族機能とソーシャルサポートを量的に明らかにした研究(平谷, 法橋, 2014), 離島と都市に住むひとり親家族を比較し環境による家族機能の影響を検討した量的研究(Hiratani, Hohashi, 2016a), 入院中の子どもをもつひとり親家族の家族機能を質的に明らかにした研究(Hiratani, Hohashi, 2016b)がある。これらの研究成果から, ひとり親家族とふたり親家族では, 家族機能レベルに有意な差がある(ひとり親家族の家族機能が低下していた)ことや, ひとり親に家族役割が集中するなど家族機能の特徴がふたり親家族とは異なることが明らかにされている。また, 家族看護学における課題として研究成果が臨床看護師によって技術として社会に還元されにくいことが指摘されている(山口, 2010)。すなわち, ひとり親家族の家族機能について既に明らかにされている知見があるが, 看護師が複数の論文を読み臨地応用するのはハードルが高く, 得られた知見が臨地で十分に活用されていない現状がある。

家族の家族機能を評価する尺度は国内外に複数存在する。例えば, Olsonらが開発したFACES (Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale) (Olson, Sprenkle, Russell, 1979) やOlsonらのモデルを基盤に立木が開発したFACESKG IV (Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale at Kwansei Gakuin IV) (立木, 1999) などがあり, 社会学者が開発した尺度が多いが看護学者が開発した尺度もある。看護学者のFeethamが開発したFFFS (Feetham Family Functioning Survey) は, 家族内の関係や資源に焦点が当てられてきたこれまでの尺度とは異なり, 家族と家族員との関係, 家族を取り囲むサブシステムとの関係, 家族と社会との関係を測定できる点の特徴である (Roberts, Feeth-

am, 1982; 法橋, 前田, 杉下, 2000)。最近では, より広い視点から環境を捉え, 時間環境を含む家族機能を評価できるSFE (Survey of Family Environment, 家族環境評価尺度) が, 日本の家族看護学者である法橋により開発された (Hohashi, Honda, 2012)。しかし, ひとり親家族の家族機能を的確にアセスメントするための家族機能尺度は開発されていない。これまでは家族機能レベルが異なるにもかかわらず, ふたり親家族を基盤に作成し, 配偶者や結婚生活に関する項目が含まれる家族機能尺度をひとり親家族にも使用していた。

本研究では, 既存のひとり親家族の家族機能研究の成果にもとづき, 看護職者がひとり親家族の家族機能をアセスメントする際に活用可能な「ひとり親家族等用家族機能尺度 (Family Functioning Scale for Single-parent Families: FFSS)」を開発し, その信頼性・妥当性を検証することを目的とした。

II. 研究方法

1. 用語の操作的定義

“家族”とは, 家族であると相互に認知し合っているひとの小集団システム (Hohashi, Honda, 2012) とした。“子育て期のひとり親家族”とは, 配偶者(婚姻関係の有無を問わない)のいない親と18歳(高校卒業年齢)以下の第1子がいる家族とした(平谷, 法橋, 2014)。“家族機能”とは, 家族員役割の履行により生じ, 家族システムユニットが果たす認識的働きならびに家族環境に対する認識的力 (Hohashi, Honda, 2012) とした。

2. 質問紙の作成・選定とその構成

1) 家族の基本属性に関する質問紙の作成

家族の基本属性に関する質問項目は, 回答者の年齢, 性別, 学歴, 就業状況, 回答者とその家族の健康状態(疾患や障がいの有無を確認し, 疾患や障害がある場合は疾患もしくは障がいの名称を記載してもらった), 家族構成, 家族周期, 第1子の年齢, ひとり親になった理由, 世帯年収とした。

2) FFSS (ひとり親家族等用家族機能尺度) の作成

①FFSSの構成と表面的妥当性の検討

日本の子育て期のひとり親家族の家族機能に焦点を当てた家族看護学研究の成果と子育て期のひとり親家族に関する文献検討の結果(平谷, 法橋, 2008; 平谷, in press)をアイテムプールとし, ひとり親家族の家族機能を表していると考えられる質問項目を複数集めた。その後, 4名の家族看護学の専門家から構成される複数回のメール会議・電話会議と6回の専門家会議を開催し, 質問項目の精選と質問内容の検討, 質問の意図が分かりにくい不適切な表現の修正を繰り返し行った。最後に, 本研究に関与していない, 子育て期家族(母親5名)にワーディングを確認してもらい, 質問の意図が分かりにくい表現がないか確認した。

ひとり親家族等用質問票は, 家族エコロジカルモデル(Bronfenbrenner, 1979; Roberts, Feetham, 1982)を理論的基盤とし, 各項目について家族機能の充足度と重要度を評価する尺度として20項目の単回答型質問と1項目の複数回答型質問で構成した。家族エコロジカルモデルは, 家族と家族をとりまく人的・物的・社会的環境をシステムとしてとらえ, 家族との相互作用を分析する生態学を基礎としたモデルである。このモデルに基づき, ひとり親家族等用質問票は, 家族との関係のみならず, 家族を取り巻く人との関係や環境への適応に焦点をあて, 家族を幅広い視点からホリスティックに捉えることができるよう考慮した。なお, FFSSの回答に要する時間を調査するため, 質問紙の余白に回答時間を記入する項目を設けた。

②FFSSの評価方法

FFSSの各20項目の単回答型質問には, 「①十分に行われていると思いますか?」「②どの程度, 重要ですか?」の2つの質問があり, 家族機能の充足度の程度は1(十分ではない)から5(十分だ), 重要度の程度は1(重要ではない)から5(重要だ)までのリッカート・スケールで回答してもらった。その後, それぞれ1点から5点として得点化する。充

足度得点は高いほど充足度が高い(家族機能が高い)ことを示し, 重要度得点は高いほど家族が価値を置いていることを示す。回答者が回答に迷わないよう, 質問紙の冒頭には, 用語の定義(「看護職者」とは, 看護師, 保健師, 助産師を指します。「子ども」とは, 18歳(高校卒業年齢)以下の子どもを指します。「家族」とは, あなたが家族と思う人を指します(法的関係の有無は問いません。))と注意事項(「①十分に行われていると思いますか?」は, 必ずしも, 家族全員で行われている必要はありません。あなたの家族にとって十分かどうか, あなたが思うままにお答えください)を示した。なお, 「家族」は回答者を含めて「家族」として回答する。

家族支援は看護師の価値観や判断に基づいて一方的に行うのではなく, 家族の価値観にそって実践する必要がある(法橋, 樋上, 2010)ことが指摘されている。したがって, 臨地現場で家族の家族支援ニーズに基づいた支援が可能ないように, 21項目目の複数回答型質問には, 看護職者による家族支援や相談の希望を確認する項目を設けている(家族機能を測定する内容ではないため, 得点化には影響しない)。

3) 既存の家族機能尺度の選定

Feetham家族機能調査日本語版I (Japanese-language Version I of the Feetham Family Functioning Survey, FFFS-J)は, 27項目で構成される家族機能尺度であり, 保育所に通う子どもをもつ子育て期家族を対象として信頼性と妥当性が確認されている(法橋, 前田, 杉下, 2000; 法橋, 本田, 平谷他, 2008)。25項目は回答選択肢型質問であり, 各項目には, それぞれ「a. 現在どの程度ありますか」「b. どの程度あると望ましいですか」「c. あなたにとってどの程度重要ですか」の3つの質問がある。これらに対して, 1(ほとんどない)~7(たくさんある)のリッカート・スケールで回答するようになっており, それぞれを現実(a得点), 理想(b得点), 価値(c得点)とする(それぞれの得点の範囲は1~7点)。さらに, 現実の家族機能と理想の家族機能の差異から家族機能充足度得点(d得点=|a得点-b

得点)を算出できる(得点の範囲は0~6点)。d得点は高いほど家族機能の充足度が低いことを示す。なお、FFFS-Jの回答選択肢型質問には、配偶者に関する項目が含まれるが、ひとり親家族にも使用可能であり、配偶者がいない場合は配偶者の役割をどの程度必要としているかをもとに質問に回答する(法橋, 本田, 平谷他, 2008)。残りの2項目は、「現在の生活において最も困っていること」と「現在の生活において最も助けになること」の自由回答型質問であり、得点には影響しない。

3. 調査対象者とサンプリングの方法

ひとり親は子どもを幼稚園より保育所に預ける比率が高い(表, 2011)ことから、認可保育所・無認可保育所・認定こども園に通う子どもをもつひとり親家族(回答者は父親もしくは母親)を対象とした。家族の成長・発達区分を統一するために、18歳(高校卒業年齢)より上の子どもがいる場合は除外することとした。

尺度開発の調査には、項目数の5倍の対象者が必要であることが指摘されている(石井, 2005)。本調査は、20項目の回答選択肢型質問で構成される尺度を開発するため、100名以上を対象者数が必要と考えられるが、回答率や有効回答率等を加味して対象者数の目安を200名に設定した。

ひとり親家族は都市部に居住する(由井, 矢野, 2000)ことから、20市ある政令指定都市から1市選択し、看護職者(看護師もしくは保健師)が配置されている、利用定員100名以上の認可保育所・無認可保育所・認定こども園に調査協力を依頼することとした。ただし、平成29年の児童のいる世帯のうち、夫婦と未婚の子のみの世帯の割合は75.1%であるのに対し、ひとり親と未婚の子のみの世帯の割合は7.5%と低いことに加え(厚生労働省, 2018)、ひとり親家族の対象を得ること自体が極めて難しいことが明らかにされている(平谷, 法橋, 2009)。特に今回は、ひとり親家族のみを対象とした調査であり、対象施設から調査協力を得ることが難しいことが予測される。したがって、その場合には、アン

ケートモニターを有しているインターネットリサーチサイトを活用した調査に切り替える計画とした。

4. 倫理的配慮

本研究は、大学の倫理委員会の承認を得たうえで実施した。対象者には、研究の目的と方法、匿名性の保持、回答を拒否したり参加を辞退する権利の保障などについて、書面もしくはオンライン(インターネット上のウェブサイト)にPDFファイルを掲載)で説明し、同意が得られた場合のみ質問に回答してもらった。すべて無記名で回答してもらい、個人が特定できないように配慮した。

5. 質問紙調査

政令指定都市であるA市内の認可保育所のリスト(322箇所)から、看護職者が配置されている、利用定員100名以上の保育所を選定すると76箇所あった。この中からランダムに抽出した16保育所に依頼した結果、1保育所から協力が得られた。さらに、保育所連盟理事会にて、依頼した16保育所とは別の20保育所に書面と口頭で調査への協力を依頼したが、これ以上の調査協力を得ることは難しい状況であった。なお、調査協力の意向の有無を確認するための返信用紙には、「研究の趣旨は理解でき価値あるものと思うが、当園の該当する保護者には時間的負担が大きいように感じる」「大切な研究であることは理解できるが、デリケートな問題であるため辞退したい」などの記載があった。

1保育所に通う子どもをもつひとり親21名に保育士を通して質問紙一式(調査への依頼状、質問紙、100円以内の薄謝、返信用封筒)を配布し、父親もしくは母親に自宅で回答してもらい、郵送にて回収した。質問紙は2018年10月15日から1週間以内の期間に配布してもらい、同年11月15日までに回収した。

6名の母親から回答があり、白紙の回答(1名)を除くと、全員がFFSSの20項目全てに回答できたことを確認でき、通過率は100%であった。ただし、高い得点傾向に偏りが生じていた項目が存在したため検討し、より適切な表現に修正した。具体的

表1. ひとり親家族用家族機能尺度 (FFSS) の質問項目

1. 家族が家族員の健康を維持すること	2. 家族が家族員の健康問題 (病気や怪我) に対処すること	3. 家族が育児や家事を行うこと	4. 家族が経済的なやり繰りをする	5. 家族で心配事を解決すること	6. 家族が癒しや支えになること	7. 家族が心配事を身内に必要時, 相談すること	8. 家族が身内から理解やサポートを得ること	9. 家族が心配事を友人・知人に必要時, 相談すること	10. 家族が友人・知人から理解やサポートを得ること	11. 家族が地域の人とのつながりをもつこと	12. 家族が地域の人から理解やサポートを得ること	13. 家族が保育・教育関係者に子育て相談をすること	14. 家族が医療関係者に健康相談をすること	15. 家族が社会資源 (社会保障や制度) を知り活用すること	16. 家族が共に有意義な時間を過ごすこと	17. 家族が安全で安心できる家庭を実現すること	18. 家族にとって過ごしやすい地域に住むこと	19. 家族が心と身体を休めること	20. 家族が再婚や就業などの希望を実現すること	21. ご回答いただいた1~20の項目のうち, 看護職者の支援や相談を必要とする内容があれば, 以下の1~20の選択肢から選んでお答えください (当てはまるもの全てに○をお付けください). その他に, 看護職者の支援や相談を必要とする内容があれば, 21に○を付け, カッコ内に自由に記載してください. 特にない場合は, 22に○をお付けください.	
1. 家族員の健康の維持	2. 健康問題への対処	3. 育児や家事を行うこと	4. 経済的なやり繰り	5. 心配事の解決	6. 家族の癒しや支え	7. 身内への相談	8. 身内からの理解やサポート	9. 友人・知人への相談	10. 友人・知人からの理解やサポート	11. 地域の人とのつながり	12. 地域の人からの理解やサポート	13. 子育て相談をすること	14. 健康相談をすること	15. 社会資源 (社会保障や制度) の活用	16. 家族との有意義な時間	17. 安全で安心できる家庭の実現	18. 過ごしやすい地域に住むこと	19. 心と身体の休息	20. 家族の希望の実現	21. その他 ()	22. 特になし

には, 15項目目の「家族が社会資源 (児童扶養手当など) を利用すること」を「家族が社会資源 (社会保障や制度) を知り活用すること」に修正した. 21項目目の質問には無回答が存在したが, この質問はFFSSの20項目のうち, 看護職者による家族支援や相談の希望があれば回答するよう指示しており, 欠損なのか家族支援の希望がないのか区別ができないため, 希望がない場合にその旨, 回答できる選択肢 (「特になし」) を追加した. 修正したFFSSの質問項目は表1に示した. FFSSの回答に要した時間の平均 (±標準偏差) は4.20 (±1.79) 分 (範囲は1~5分) であった. 回答者数が少なく, これ以上の分析は難しいため, インターネットモニター調査を実施することとした.

6. インターネットモニター調査

インターネットモニター調査を管理している会社
が実施している通常の調査方法に基づき, 調査実施前にスクリーニング調査を実施した. 具体的には,

「子どもがいる」と登録しているモニターに認可保育所・無認可保育所・認定こども園に通う子育て期のひとり親家族かどうか (対象者かどうか) を確認した. 次に, インターネットモニター調査 (家族の基本属性, FFSS, FFFS-Jから構成される質問紙調査) を実施するために, インターネットモニター調査会社を通じて対象者に電子メールを配信した. なお, インターネットモニター調査は, 回答を中断して一時保存した後, 再開できる機能があり, 正確な回答時間の把握は困難であるため, 質問紙から回答時間に関する質問は除いた. モニターはウェブ上でモニターサイトにアクセスするか, 専用アプリでログインすると, 本調査を含め, そのモニターが回答可能な調査が表示される. 表示された複数の調査の中から本調査をクリックすると, 別ブラウザで依頼文が表示されるため, 依頼文を読み, 参加の意思のある場合のみ, 自ら調査画面に進み, 回答してもらった. 回答は, 設定した対象者数の目安である

200名の回答が集まった時点以降に締め切った。さらに、FFSSの反復信頼性の検討を目的とした2回目のインターネットモニター調査（FFSSのみで構成される質問紙調査）を実施するために、1回目のインターネットモニター調査の回答者（200名）を対象に、1回目の調査回答日から2週間程度の期間をあけて（1週間以上2週間以内に）、インターネットモニター調査会社を通じて対象者に電子メール配信した。回答は、200名の対象者の半数である100名の回答が集まった時点以降に締め切った。調査実施時期は、1回目の調査が2019年1月11日から同年1月12日、2回目の調査が2019年1月20日から同年1月21日であった。なお、インターネットモニター調査会社の規定に準じて、回答者には100円以内のポイントを付与した（ポイントを貯めると商品に交換できる）。

7. データの集計と解析

データの集計および解析は、Windowsパソコン上の統計解析ソフトウェアSPSS 24.0（エス・ピー・エス・エス株式会社）を使用し、有意水準は5%とした。

FFSSの得点分布を確認した後、総得点と各項目の平均得点の上下1SDで回答者を上位群・中位群・下位群に区分し、上位群と下位群の平均得点をWilcoxonの符号付順位和検定により比較する上位-下位分析（Good-Poor Analysis）を行い、各項目を検討した。因子分析を用いて因子構成を分析することにより構成概念妥当性を検討した。FFSSとFFFS-Jの両方を回答したひとを対象に、これらの平均得点の相関により併存妥当性を検討した。Cronbachの α 係数を算出することにより内部整合信頼性を検討した。さらに、FFSSに2週間程度の期間をあけて2回とも回答したひとを対象として、これらの平均得点の相関により反復信頼性を検討した。なお、2回の調査の照合は、ID番号（通し番号）から判断した。

FFFS-Jの自由回答型質問（2項目）は、「現在の生活において最も困っていること」と「現在の生活

において最も助けになること」を分析対象とし、それぞれ記述全体を文脈単位、1内容を1項目として含む文または単語を記録単位とした。記述全体を繰り返し読み、文意を認識し理解したうえで、個々の記録単位の意味内容の類似性と差異性にもとづき分類し、カテゴリーを命名した。その後、カテゴリーに分類された記録単位数を算出し、高い頻度で出現するカテゴリーを明らかにした。

III. 結果

1. 回答者の基本属性

1回目の調査は、45都道府県の206名（父親5名、母親201名）のひとり親から回答があり、有効回答とした。2回目の調査は103名（父親1名、母親102名）から回答があり、有効回答とした。有効回答者の103名は全員が1回目の有効回答者206名の中に含まれており、同一人物であった。有効回答が得ら

表2. 回答者の属性（N = 206）

項目	人数 (%)			
学歴	中学もしくは高校卒業	101 (49.0)		
	高等教育機関 ¹⁾ 卒業	100 (48.5)		
	大学院卒業	5 (2.4)		
就業状況	正規	88 (42.7)		
	非正規	100 (48.5)		
	自営業	5 (2.4)		
疾患の有無 ²⁾	有り	38 (18.4)		
	無し	168 (81.6)		
	疾患の有無 ³⁾	有り	33 (16.0)	
無し		173 (84.0)		
家族形態		核家族	131 (63.6)	
	拡大家族	75 (36.4)		
家族周期	養育期	139 (67.5)		
	教育期	67 (32.5)		
ひとり親の理由	離婚	150 (72.8)		
	死別	6 (2.9)		
	未婚	49 (23.8)		
	その他	1 (0.5)		
	平均	標準偏差	範囲	
年齢 (歳)	33.1	5.7	22~49	
子どもの人数 (名)	1.6	0.8	1~5	
同居家族の人数 (名)	3.4	1.4	2~9	
第1子年齢 (歳)	6.1	4.0	0~18	
世帯年収 (万円)	310.8	252.7	0~2,000	

¹⁾ 高等教育機関：高等専門学校、専門学校、短期大学、大学

²⁾ 疾患の有無：回答者の疾患・障害の有無

³⁾ 疾患の有無：疾患・障害をもつ家族員の有無

表3. ひとり親家族用家族機能尺度 (FFSS) 20項目の項目別の得点 (N = 206)

項目	平均 (±標準偏差)	
	充足度得点	重要度得点
1. 家族が家族員の健康を維持すること	3.37 (±1.06)	4.62 (±0.76)
2. 家族が家族員の健康問題 (病気や怪我) に対処すること	3.54 (±1.07)	4.67 (±0.66)
3. 家族が育児や家事を行うこと	3.30 (±1.17)	4.44 (±0.82)
4. 家族が経済的なやり繰りをする	2.69 (±1.16)	4.51 (±0.84)
5. 家族で心配事を解決すること	3.12 (±1.08)	4.35 (±0.86)
6. 家族が癒しや支えになること	3.70 (±1.13)	4.52 (±0.79)
7. 家族が心配事を身内に必要時, 相談すること	3.38 (±1.27)	4.32 (±0.90)
8. 家族が身内から理解やサポートを得ること	3.39 (±1.23)	4.35 (±0.85)
9. 家族が心配事を友人・知人に必要時, 相談すること	3.19 (±1.12)	3.77 (±1.13)
10. 家族が友人・知人から理解やサポートを得ること	3.21 (±1.16)	3.85 (±1.10)
11. 家族が地域の人とのつながりをもつこと	2.88 (±1.10)	3.57 (±1.10)
12. 家族が地域の人から理解やサポートを得ること	2.74 (±1.10)	3.62 (±1.06)
13. 家族が保育・教育関係者に子育て相談をすること	3.24 (±1.15)	3.95 (±0.98)
14. 家族が医療関係者に健康相談をすること	3.32 (±1.12)	3.98 (±0.98)
15. 家族が社会資源 (社会保障や制度) を知り活用すること	2.98 (±1.06)	4.29 (±0.95)
16. 家族が共に有意義な時間を過ごすこと	3.30 (±1.16)	4.52 (±0.76)
17. 家族が安全で安心できる家庭を実現すること	3.42 (±1.10)	4.63 (±0.69)
18. 家族にとって過ごしやすい地域に住むこと	3.67 (±1.08)	4.49 (±0.77)
19. 家族が心と身体を休めること	3.10 (±1.24)	4.60 (±0.72)
20. 家族が再婚や就業などの希望を実現すること	2.77 (±1.21)	4.11 (±1.07)

れた206名の属性は表2にまとめた。なお、回答者の健康状態について、206名中38名のひとり親 (38名は全員が母親であった) がうつ病 (6名) や気管支喘息 (6名)、関節リウマチ、下垂体機能低下症などの健康問題を抱えていた。なお、うつ病と回答したひとり親の中には不安障害や気分障害も抱えているひとり親が存在した。うつ病や不安障害などを含むメンタルヘルスに関する疾患があると回答したひとり親は38名中13名であった。また、206名中33名のひとり親が自分以外の家族員が健康問題を抱えていると回答しており、その内訳は、子どもの気管支喘息 (6名)、子どもの発達障害もしくはその疑い (5名) の順に多かった。

2. 各項目の検討

20項目の平均得点は表3にまとめた。家族機能の充足度得点については、天井効果、床効果ともに認められなかったが、重要度得点については20項目中14項目に天井効果が認められた。残りの6項目も平均 (±標準偏差) が3.57 (±1.10) から3.98 (±0.98) と高い得点方向に偏りがみられた。

FFSSの家族機能充足度の総得点の平均は64.33 (±15.07) 点で、上位群27名 (79.40点以上) と下位群28名 (49.26点以下) では平均得点に有意差が

認められた ($p=0.000$)。同様に各項目の平均得点で3群に区分した後、上位群と下位群の平均得点を比較した結果、全20項目で有意差が認められた (いずれの項目も $p=0.000$)。

3. 構成概念妥当性の検討

重み付けのない最小2乗法による因子分析 (プロマックス回転) により因子を抽出して評価した結果を表4にまとめた。因子数はスクリープロットによる結果から2因子とした。累積寄与率は70.4%であった。因子負荷量0.35以上の項目を採択すると、第1因子に13項目、第2因子に7項目が抽出された。2因子の因子相関係数は0.641であった。

4. 併存妥当性の検討

FFSSの家族機能充足度総得点とFFFS-Jの家族機能充足度総得点とのSpearmanの順位相関係数は-0.34 ($p=0.000$) であった。FFFS-Jには配偶者との関係に関する項目が含まれているため、これら9項目を除いたFFFS-Jの家族機能充足度総得点とのSpearmanの順位相関係数も算出したところ、-0.39 ($p=0.000$) であった。

5. 内部整合信頼性の検討

FFSSの全20項目のCronbachの α 係数は0.93、下位尺度毎のCronbachの α 係数は、第1因子 (13項

表4. ひとり親家族用家族機能尺度 (FFSS) の重み付けのない最小2乗法による因子分析 (プロマックス回転) (N = 206)

項目	第1因子	第2因子
1. 家族が家族員の健康を維持すること	0.76	-0.09
2. 家族が家族員の健康問題 (病気や怪我) に対処すること	0.83	-0.17
3. 家族が育児や家事を行うこと	0.76	-0.11
4. 家族が経済的なやり繰りをすること	0.78	-0.16
5. 家族で心配事を解決すること	0.81	-0.07
6. 家族が癒しや支えになること	0.60	0.20
7. 家族が心配事を身内に必要時, 相談すること	0.55	0.20
8. 家族が身内から理解やサポートを得ること	0.39	0.30
9. 家族が心配事を友人・知人に必要時, 相談すること	0.07	0.65
10. 家族が友人・知人から理解やサポートを得ること	-0.01	0.78
11. 家族が地域のひととのつながりをもつこと	-0.08	0.75
12. 家族が地域の人から理解やサポートを得ること	-0.11	0.79
13. 家族が保育・教育関係者に子育て相談をすること	-0.10	0.78
14. 家族が医療関係者に健康相談をすること	0.04	0.65
15. 家族が社会資源 (社会保障や制度) を知り活用すること	0.28	0.38
16. 家族が共に有意義な時間を過ごすこと	0.55	0.18
17. 家族が安全で安心できる家庭を実現すること	0.67	0.21
18. 家族にとって過ごしやすい地域に住むこと	0.45	0.23
19. 家族が心と身体を休めること	0.69	0.07
20. 家族が再婚や就業などの希望を実現すること	0.47	0.16
因子寄与	7.59	6.48
寄与率 (%)	38.0	32.4

累積寄与率: 70.4%

表5. ひとり親が看護師に希望する家族支援 (N = 206)

ランキング	項目	人数	%
1	2. 健康問題への対処	80	14.1
2	1. 家族員の健康の維持	68	12.0
3	14. 健康相談をすること	54	9.5
4	19. 心と身体の休息	52	9.2
5	22. 特になし	51	9.0

目) が0.92, 第2因子 (7項目) が0.87であった。

なお, FFSS-Jの全25項目のCronbachの α 係数は0.89, 配偶者に関する項目を除く16項目のCronbachの α 係数は0.83であった。

6. 反復信頼性の検討

FFSSに2週間程度の期間をおいて2回回答した103名を対象に, 2回の調査間のSpearmanの順位相関係数を算出したところ, 0.81 ($p=0.000$) であった。

7. ひとり親が看護職者に希望する家族支援

FFSSの複数回答型質問に対する回答から得られた, ひとり親が看護職者の支援や相談を希望する内容は, 表5にまとめた。看護職者に希望する家族支援の第1位は「2. 健康問題への対処」であった。

表6. ひとり親が最も困っていることと最も助けになることの上位5項目

困っていること (n = 206, 記録単位数 = 279)			
ランキング	カテゴリー	記録単位数	%
1	経済的な余裕のなさ	94	33.7
2	子育てに関する悩み	39	14.0
3	特になし	25	9.0
4	時間的な余裕のなさ	23	8.2
5	仕事や家事, 育児の両立	15	5.4
助けになること (n = 206, 記録単位数 = 234)			
ランキング	カテゴリー	記録単位数	%
1	親の存在	31	13.2
2	親の協力	28	12.0
3	子どもの存在	23	9.8
3	子どもの笑顔	23	9.8
5	お金・手当 (児童扶養手当等)	18	7.7

8. ひとり親が最も困っていることと最も助けになること

FFSS-Jの自由回答型質問から得られたカテゴリーは, 記録単位数が多い順に上位5項目を表6に示した。最も困っていることの第1位は「経済的な余裕のなさ」で, 最も助けになることの第1位は「親の存在」であった。

IV. 考 察

1. 本研究参加者の特徴と看護職者に希望する家族支援

本調査は、1保育所で質問紙調査を実施した後、インターネットモニター調査を実施した。インターネットモニター調査は、回答者の学歴が高い傾向にあること、郵送法と比較して回答が批判的になる傾向があることが指摘されている(石田, 佐藤, 佐藤他, 2009)。本研究参加者の基本属性を全国ひとり親世帯等調査(厚生労働省, 2017)の母子世帯の母親の基本属性と比較すると、全国ひとり親世帯等調査の母親の平均年齢は33.8歳、同居家族の人数は3.3人、母子のみの核家族の割合は61.3%であり、本研究参加者の基本属性と類似していた。一方で、全国ひとり親世帯等調査の母親の就業の割合は81.8%、離婚によりひとり親になった割合は79.5%、世帯年収は348万円、中学もしくは高校卒業の割合が56.3%であるため、本研究参加者のほうが、就業率が高く、離婚によりひとり親になった割合が低く、世帯年収が低く、学歴が高い傾向にあった。全国ひとり親世帯等調査は、父親もしくは母親がいない、あるいは父母ともにいない、満20歳未満の未婚の子どもを養育している世帯を対象とし、調査員が対象世帯を訪問して調査票を手渡し、郵送により調査票の回収を行う方法で実施している調査である。本調査とは対象が異なることに加えて、母子世帯と父子世帯の結果を分けて示しているため、単純に比較することについては限界がある。また、調査回答者の偏りはインターネットモニター調査だけの問題ではなく、従来型調査手法でも発生していることや設問のタイプによっては、調査間で差がないことも指摘されているため(萩原, 2009)、インターネットモニター調査を特別に問題とする必要はないと考えられる。しかし、インターネットモニター調査の特徴により、回答に偏りが生じた可能性が考えられる。

ひとり親家族は子育てや家事、就労という複数の役割をひとりの親が担うことが多く、子育て、収入、

住居などの生活面で様々な困難に直面することが明らかにされている(新保, 2003)。本調査に参加したひとり親も経済的な余裕や時間的な余裕のなさ、子育てに関する悩み、複数の役割の両立を困りごととして回答しており、同様の結果であることが推測された。また、認可保育所・無認可保育所・認定こども園に通う子どもをもつひとり親家族の中にはメンタルヘルスや気管支喘息などの健康問題を抱える家族員がいる家族も多く、看護職者に健康や子育てに関する支援や相談を希望していることが明らかになった。したがって、看護職者は、保育所においても看護職者による健康相談や子育て支援が必要であることを理解し、子どもだけではなく家族全体をケアの対象と捉え、家族支援を行うことが重要であろう。

2. FFSSの項目分析と妥当性

FFSSの得点分布を見ると、家族機能の充足度得点については、天井効果、床効果ともに認められなかったが、重要度得点については20項目中14項目に天井効果が認められたため、家族機能の重要度の評価は採用しないこととした。FFSSの各項目はひとり親家族を対象とした研究結果から抽出しており、ひとり親はこれらの内容を重要視しているため、天井効果が認められたと考えられる。上位-下位分析では、全項目において上位群と下位群の得点に有意差が認められたため、FFSSの各項目は弁別力が高いと判断できる。これらより、FFSSの各項目は、適切な項目から構成されていると考えられる。

因子分析の結果、FFSSは2因子構造であった。第1因子は家族と家族員や身内との関係を測定していると考えられるため「家族内部環境と身内との関係」とし、第2因子は家族と友人・知人、地域の人、保育・教育関係者、医療関係者との関係を測定していると考えられるため「家族外部環境(身内を除く)との関係」と命名した。FFSSと同じく、家族エコロジカルモデルに基づき開発されたFFFS-Jは3因子構造(「家族と個々の家族構成員との関係」「家族とサブシステムとの関係」「家族と社会との関係」)であるのに対し、ひとり親家族を対象として

開発したFFSSは2因子構造であり、家族機能のデータの特徴が異なっていた。FFFS-Jの自由回答型質問に対する回答より、ひとり親家族は、家族機能の良好な維持にひとり親の親との関係を重要視しているため、家族と家族員との関係を測定するドメインに身内との関係を測定する内容が含まれた可能性や、親がふたり存在するふたり親家族と比較し、親がひとりのひとり親家族は家族を取り巻く環境との関係が、よりシンプルである可能性が考えられる。なお、第1因子と第2因子の因子相関係数は0.641と比較的強い相関があることが明らかになり、「家族内部環境と身内との関係」が良好な家族は「家族外部環境（身内を除く）との関係」も良好である可能性が考えられる。

FFSSの併存妥当性を検討した結果、FFSSとFFFS-JのSpearmanの順位相関係数は -0.34 、FFFS-Jの配偶者に関する項目を除いた場合のSpearmanの順位相関係数は -0.39 であり、相関があると判断できる。すなわち、併存妥当性が確保できたと考えられる。なお、FFSSは得点が高いほど家族機能が高いことを示すが、FFFS-Jは得点が高いほど家族機能が低いことを示すため、逆相関（負の関係）を示す。

3. FFSSの信頼性

FFSSの全20項目と各下位尺度のCronbachの α 係数を算出したところ、0.8以上（鳩野, 2016）の値を示したため、尺度の内部整合信頼性は確保できたと考えられる。一方で、0.95以上など、あまりにも高すぎる場合は、類似性の高い項目が複数含まれることも懸念される（吉岡, 2012）が、0.95を下回った。

2週間の間隔をおいて実施した再テスト法においては、Spearmanの順位相関係数が0.7以上（鳩野, 2016）の値を示し、尺度の反復信頼性が確保できたと考えられる。

4. FFSSの特徴と適用

FFSSは、過去に積み重ねられてきた、ひとり親家族の家族機能研究の成果を臨地現場で活用しやすいよう尺度化したものである。本尺度を使用するこ

とでエビデンスに基づいた看護を実践できる。このような尺度は国内外に存在せず、ひとり親家族の家族看護学研究の推進にも役立つと考えられる。

本研究結果から明らかになったように、本尺度項目のすべてがひとり親家族の家族機能の遂行に重要であり、看護職者がFFSSを見ることでアセスメントの視点が得られる。FFSSは家族に回答してもらうことで家族機能レベルを数値化でき、家族機能充足度得点を算出するための計算を必要としないため、対象家族の家族機能の現状や家族が看護職者に希望する家族支援を迅速に判断できる。家族の希望も確認でき、家族のニーズに応じた家族支援を計画できる。なお、家族機能の充足度が低いが、家族が看護職者の支援や相談を希望していない項目は、家族が踏み込まれたくない領域である可能性や看護職者以外の人から支援を求めている可能性、看護職者に遠慮したり、看護職者には支援や相談を求められないと考えている可能性が考えられるため、経過観察したり、信頼関係を十分に構築してから家族支援を計画する方がよいと判断できる内容である。

既存の家族機能尺度は、ふたり親家族を基盤に作成しているため、ひとり親家族にも使用可能と明記していても、例えば、配偶者や結婚生活、性生活に関する項目など、ひとり親家族には回答しづらい項目が多く含まれていた。また、ひとり親家族とふたり親家族では家族機能の特徴が異なるだけでなく、家族機能尺度の因子構造が異なることが明らかになったため、ひとり親家族の家族機能を的確にアセスメントするためには、ひとり親家族に適した尺度を使用する必要がある。例えば、ひとり親家族であっても母子家庭と父子家庭、父子家庭であっても父親と娘、父親と息子から構成される家族の場合は、家族の特徴や機能が異なる可能性が考えられる。このようなひとり親家族の多様性を踏まえて、家族構成などが異なるひとり親家族を比較する際や、ひとり親家族の家族差や家族の希望を加味したテーラーメイドな家族支援を行う場合などに本尺度を活用できよう。

V. 結 論

ひとり親家族の家族機能を評価するために、認可保育所・無認可保育所・認定こども園に通う子どもをもつひとり親家族を対象に、ひとり親家族等用家族機能尺度 (FFSS) を開発した。FFSSは信頼性・妥当性があり、平均4分で回答できる尺度であることが明らかになった。今後、FFSSが、ひとり親家族の家族機能を定量的に測定する尺度として活用され、ひとり親家族の家族支援に寄与することを期待したい。

謝 辞

本研究は、JSPS科研費JP15K11657の助成を受けたものである。貴重な時間を費やし、調査にご協力くださいました対象者の皆様と保育所の先生方に深謝いたします。また、論文をまとめるにあたり貴重なご意見をいただきました小寺さやか先生 (神戸大学大学院保健学研究科) に拝謝いたします。

各著者の貢献

YHは、①研究の構想およびデザイン、データ収集、データ分析・解釈の全てに十分に貢献した、②論文の作成または重要な知的内容に関わる批判的校閲に関与した、③発表原稿の最終承認を行った、④研究のあらゆる内容に対して、正確性や整合性に関する疑問が適切に調査され解決されることに責任をもつ、研究のすべての面に対して説明責任があることに同意した。KHとNHは、①研究の構想に十分に貢献した、②論文の作成または重要な知的内容に関わる批判的校閲に関与した、③発表原稿の最終承認を行った、④研究のあらゆる内容に対して、正確性や整合性に関する疑問が適切に調査され解決されることに責任をもつ、研究のすべての面に対して説明責任があることに同意した。

〔受付 '19.06.20〕
〔採用 '19.12.02〕

文 献

Bomar, P. J.: Family health promotion and family nursing in the new millennium, (P. J. Bomar Ed.), Promoting health in families: Applying family research and theory to nursing practice (3rd edn), 634-650, Saunders, Philadelphia, PA, 2004

Bronfenbrenner U.: The ecology of human development, experiments by nature and design, Harvard University Press, Cambridge, MA, 1979

萩原牧子：インターネットモニター調査はどのように偏っ

ているのか：従来型調査手法に代替する調査手法の模索, Works Review, 4: 8-19, 2009

鳩野洋子：尺度を選ぶ：研究の目的に合った尺度をどう選ぶか, 川本利恵子編集, 看護研究の精度向上・時間短縮のために「尺度」を使った看護研究のキホンとコツ, 10-28, 日本看護協会出版会, 東京, 2016

平谷優子, 法橋尚宏：ひとり親家族に関する国内文献の動向と家族看護学研究の課題, 家族看護学研究, 13(3): 165-172, 2008

平谷優子, 法橋尚宏：離婚を経験した養育期のひとり親家族の家族機能と家族支援, 家族看護学研究, 15(2): 88-98, 2009

Hiratani, Y., Hohashi, N.: Family functions of child-rearing single-parent families in Japan: A comparison between single-parent families and pair-matched two-parent families, Japanese Journal of Research in Family Nursing, 16 (2): 56-70, 2010

Hiratani, Y., Hohashi, N.: Family functioning of single-parent families with children attending a special needs school: A mixed method study, Final Conference Program of the 11th International Family Nursing Conference, 11, 2013

平谷優子, 法橋尚宏：子育て期のひとり親家族の家族機能と認知的ソーシャルサポート, 家族看護学研究, 20(1): 38-47, 2014

Hiratani, Y., Hohashi, N.: A comparison study of single-parent families living on remote, rural islands and in urban settings in Japan, The Journal of Nursing Research, 24 (6): 145-152, 2016a

Hiratani, Y., Hohashi, N.: Family functioning of single-parent families with a hospitalized children in Japan, 19th EAFONS (East Asian Forum of Nursing Scholars) Abstract book: Poster presentation, 165-166, 2016b

平谷優子：ひとり親家族に関する国内文献レビュー：2007-2014年の論文を対象とした検討, 家族看護学研究, 25 (1): in press

法橋尚宏, 樋上絵美：現代家族像と家族環境, 法橋尚宏編集, 新しい家族看護学：理論・実践・研究, 2-16, メヂカルフレンド社, 東京, 2010

Hohashi, N., Honda, J.: Development and testing of the Survey of Family Environment (SFE): A novel instrument to measure family functioning and needs for family support, Journal of Nursing Measurement, 20(3): 212-229, 2012

法橋尚宏, 本田順子, 平谷優子他：家族機能のアセスメント法：FFFS日本語版Iの手引き, EDITEX, 東京, 2008

法橋尚宏, 堀口和子, 樋上絵美：家族看護の場とパラダイム, 法橋尚宏編集, 新しい家族看護学：理論・実践・研究, 57-60, メヂカルフレンド社, 東京, 2010

法橋尚宏, 前田美穂, 杉下知子：FFFS (Feetham家族機能調査) 日本語版 I の開発とその有効性の検討, 家族看護学研究, 6(1): 2-10, 2000

石田 浩, 佐藤 香, 佐藤博樹他：信頼できるインター

ネット調査法の確立に向けて, SSJDA リサーチペーパーシリーズ42, 東京大学社会科学研究所, 東京, 2009

石井秀宗: 統計分析のここが知りたい: 保健・看護・心理・教育系研究のまとめ方, 文光堂, 東京, 2005

厚生労働省: 平成28年度全国ひとり親世帯等調査結果報告. <https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-119-23000-Kodomokateikyoku-Kateifukishika/0000190325.pdf>. 2017 (2019年3月28日)

厚生労働省: 平成29年国民生活基礎調査の概況. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa17/dl/10.pdf>. 2018 (2019年2月27日)

日本保育協会: 保育所の環境整備に関する調査研究報告書平成21年度. http://www.fn.m.u-tokyo.ac.jp/upload/H21-report_hoiku.pdf. 2009 (2019年3月24日)

Olson, D. H., Sprenkle, D. H., Russell, C. S.: Circumplex model of marital and family systems: I. Cohesion and adaptability dimensions, family types, and clinical applications. *Family Process*, 18(1): 3-28, 1979

表真美: ひとり親家族の家庭教育と子育て, 京都女子大学発達教育学部紀要, 7: 1-8, 2011

Roberts, C. S., Feetham, S. L.: Assessing family functioning across three areas of relationships, *Nursing Research*, 31(4): 231-235, 1982

新保幸男: ひとり親家庭の生活現状と課題, 月刊福祉, 86(10): 12-15, 2003

立木茂雄: 家族システムの理論的・実証的検証: オルソンの円環モデル妥当性の検討, 川島書店, 東京, 1999

山口桂子: 研究と実践をつなぐもの: 家族看護学の有機的な発展をめざして, 日本家族看護学科第17回学術集会講演集, 28: 2010

吉岡さおり: 測定尺度の信頼性と妥当性, 小笠原知枝, 松木光子編集, これからの看護研究: 基礎と応用第3版, 133-139, スーヴェルヒロカワ, 東京, 2012

由井義通, 矢野桂司: 東京都におけるひとり親世帯の住宅問題, *地理科学*, 55(2): 77-98, 2000

Development of a Family Functioning Scale for Single-parent Families (FFSS) and Evaluation of its Reliability and Validity

Yuko Hiratani¹⁾ Kazuko Horiguch²⁾ Naohiro Hohashi³⁾

1) Department of Pediatric Nursing, Graduate School of Nursing, Osaka City University

2) School of Nursing, Hyogo University of Health Sciences

3) Division of Family Health Care Nursing (Certified Nurse Specialist [CNS] in Family Health Nursing Program), Graduate School of Health Sciences, Kobe University

Key words: Single-parent family, Family functioning, Instrument development, Family support

It has been pointed out that differences in family functioning exist between single-parent families and two-parent families. However, scales of family functioning for single-parent families have yet to be developed. The aim of this study was to develop a Family Functioning Scale for Single-parent Families (FFSS) and to evaluate its reliability and validity.

Items were selected through previous studies on family functioning and literature reviews concerning single-parent families, from which the FFSS was constructed. It is structured as a self-administered questionnaire composed of 21 items. Face validity was confirmed by four researchers. For the preparation, a questionnaire survey was conducted for single-parent families in one nursery school. After we revised this FFSS, a survey was conducted via the internet to evaluate the reliability and validity. The participants were single-parent families with children enrolled in nurseries throughout Japan.

When the FFSS was administered to parents, significant differences were observed between good and poor groups for all items in the good-poor analysis. Spearman's correlation coefficient between FFSS and Japanese-language Version I of the Feetham Family Functioning Survey (FFFS-J) was -0.34 , and after eliminating spouse-related items, it was -0.39 , which supported concurrent validity. Having examined the construct validity, two factors were obtained from factor analysis. Cronbach's alpha coefficient was 0.93, showing high internal consistency reliability. Spearman's correlation coefficient was 0.81 at about a 2-week interval, providing test-retest reliability.

In conclusion, it was indicated that the FFSS is a reliable and valid instrument to assess family functioning of single-parent families. The FFSS will contribute to efforts at family support and future research concerning single-parent families.